

『小池邦夫のことば集―ずっと手紙を書いてきた』

◎読者投票で選ばれた一三七の言葉を収録！

本書は当協会の機関誌『月刊絵手紙』誌上で昨年、読者の皆さまから募集した「私の好きな小池邦夫の言葉」を一冊にまとめたものです。いただいた二〇〇〇通以上の応募より一三七のことばを収録しています。

もくじ

一人だけの革命／動かなければ出会えない／ヘタでいいヘタがいい／あせらないけどあきらめない
／手紙は手仕事心仕事心
よおどれおどれ／一生涯
素人／巻末ロングインタビュー
「僕がずっと手紙を書いている理由」



◎十九歳から五十五年間、毎日手紙を書いてきた
小池邦夫

小池は十九歳から同郷の友に手紙を書き始め、「絵手紙」という新しい表現方法を模索し続けてきました。三七歳で、『季刊銀花』に六万枚の肉筆絵手紙を挟みこむ企画を受け、一日に二百枚の絵手紙を書く生活を一年間続けました。やっとかき終えたその晩、家族四人ですきやきを囲み達成を祝します。ところがその数時間後、突然最愛の妻がくも膜下出血で急逝。手紙で生きていく、と決めた夫を高校教師をしながら支え続けた妻との早すぎる別れ。これが小池を一層「手紙書き」の道へと駆り立てました。

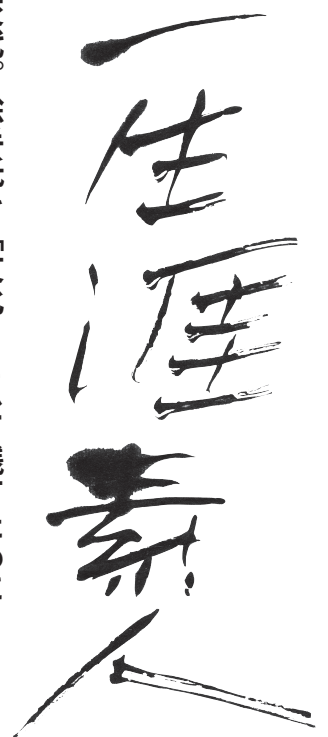


◎日本絵手紙協会創立から三〇年
現在の絵手紙愛好者は一〇〇万人とも

その後、小池は一九八五年に四〇代で日本絵手紙協会を立ち上げます。当初の会員数は約一〇〇名。一九九五年には東京・京橋に事務所を構え、その翌年から機関誌『月刊絵手紙』を発行。現在会員は約一万五〇〇〇名、小池の絵手紙精神を伝える講師の数も約三〇〇〇名にまで増えました。

国内の絵手紙愛好者は今や一〇〇万人とも言われています。その広がりには国内だけにとどまらず、上海、ハワイ、ドイツ、フランス、中国、ブラジルなどこれまで世界各地で絵手紙が日本文化として紹介されてきています。

協会の近年の取組みとしては、三年前から年に一度イタリア・フィレンツェで絵手紙の体験教室を開催。日本とイタリアの文通も順調に進んでいます。



◎会長交代。絵手紙を「文化」として残すために

今年の年頭、小池は、年度末の三月末日をもって会長職を辞任する意向を発表しました。

もともと自らを「組織には向かない人間」「ただの手紙書き」としていた小池は、「絵手紙なんてちっぽけなものには私一代で終わると思っていた」と言います。しかしここ数年、小池邦夫の絵手紙精神を受け継ぐ講師の皆さんや協会の若いスタッフから「絵手紙を文化として伝え残したい」という声が上がりはじめると、「その思いが嬉しかった。」と絵手紙愛好者たちの熱意に応え、協会の発展を願って、後任に道を託すこととなりました。そして今年は「絵手紙の創始者」として全国十五か所にて講演会を開催する予定です。

※新会長には協会創立当初から活動に参加していた登坂和雄氏（五十五歳）が就任します。

◎「絵手紙はかき方ではない、生き方だ」
身をけずりながら得た哲学が詰まった一冊！

絵手紙とは、単に「絵のある手紙」というだけでは
ありません。「ヘタでいいヘタがいい」という絵手紙
のモットーの通り、形式ばった従来の手紙の型から抜
け出し、自由に自分らしく、素直な思いを手がきで届
けることが絵手紙の本当の精神です。本書にも「絵が
あるか墨で書いているかではない、心が書かれている
か、それだけ」（『ことば集』一〇〇頁）ということば
があります。また小池は、「絵手紙とはかき方ではな
く、生き方」である」とも言います。

「才能がなかった」と語る小池が、書道や文学など
既存の表現方法から抜け出し、ハガキという新しい表
現の場を追求しつづけた道は、けっして平坦なものだ
はありませんでした。身をけずりながら得た哲学が、
この一冊には詰まっています。絵手紙愛好者はもちろ
んのこと、現代を生きる人々皆の背中を押してくれる
内容です。



◎本件のお問い合わせは左記までお願いします

〒103-0027

東京都中央区日本橋3-5-11八重洲中央ビル3階

一般社団法人 日本絵手紙協会 ※営業平日10時～18時

『月刊絵手紙』編集部（担当・鹿間寛子 雨宮真帆）

電話 03-3242-7885

FAX 03-3242-7881

〈プロフィール〉

手紙書き・小池邦夫の歩んできた道

昭和 16 年(1941)愛媛県松山市生まれ。小学校 3 年生の時、大山積神社（松山市内）の石柱に彫られた三輪田米山の書「無為而尊（むいにしてとうとし）」に心打たれる。中学の担任から届いたハガキの言葉「君には秘めたものがあるのを私は知っている」に感動し手紙の力を知る。



昭和 34 年(17 歳)武者小路実篤の精神に触れ、人を生かし自分を生かすために「筆一本で立つ」と志を立てる。

昭和 35 年(18 歳)東京学芸大学書道科に入学。翌年より同郷の友人で書家の正岡千年氏に手紙をかき始め、現在も送り続けている。

昭和 41 年(25 歳)作家瀧井孝作に師事。画家中川一政、歌人・書家清水比庵などに学ぶ。

昭和 53 年(37 歳)『季刊銀花』に特集され、とじ込み企画として一年間に六万枚の絵手紙をかき、話題をよぶ。

東京・狛江郵便局で「親子絵手紙教室」開催。これにより狛江が『絵手紙発祥の地——狛江』となる。

昭和 60 年(44 歳)日本絵手紙協会を創設、会長となる。絵手紙友の会を結成。

平成 8 年(55 歳)日本絵手紙協会より『月刊絵手紙』創刊、毎月メッセージを掲載。

平成 16 年(63 歳)小池邦夫絵手紙美術館（山梨県忍野村）がオープン。

平成 21 年(68 歳)群馬・上武大学の客員教授に、平成 26 年(73 歳)同大学「手書き文化研究所」所長に就任。絵手紙の創始者として指導、講演、展覧会、テレビ出演などを通じ絵手紙運動を続ける。

平成 26 年(73 歳)東京スカイツリータウンの郵政博物館にて「小池邦夫絵手紙展—軌跡と未来—」開催（2015 年 3 月 29 日まで）。

平成 27 年(74 歳)日本絵手紙協会会長を退任することを発表。

著書に『神様が宿る絵手紙！』（清流出版）、『小池邦夫の落書帖』（文化出版局）、『小池邦夫の彩墨富嶽百景』（郵研社）など多数。